



あとがき

世界のできごとを話そうとしたおじいさんの語りが、なんとか幕を閉じたことにほっとしている。君たちの中に、なにがしかのことが残ることを願っている。

年の功があるだろうと始めてみて、知らないことばかりだということを、あらためて知った。だから、知ったかぶりをして話したことは、じつのところ、おじいさんが先人から聞きとる仕事だったのだ。つまり、この物語はおじいさんの学習ノートに過ぎない。少し考えを足してみたけれど、誤りが多いことだろう。それを正して、君たちは自分の歴史観をつくっていつてくれたまえ。

ところで、おじいさんの話は、今流に、起きたできごと自体に歴史を観るというやり方だった。しかし、昔の知恵ある人たちは、歴史をそのようにだけ学んだのではなかった。歴史で重要な役割をはたしたそれぞれの人間が、そのときどのように行動したかを知って、自分で考えることが大事だとしたのだ。ヨーロッパの人たちは、プルタルコス『英雄伝』をそのように読んだ。だからおじいさんは、司馬遷『史記』やトゥキディデスの『歴史』の名をあげたのだ。プルタルコスは、「徳にいたる道を照らすように」書いた。このように、人間をきたえるような「歴史」にも、関心を広げることを君たちに勧めたい。そういう話の方が、きっと聞いておもしろいだろう。

尊敬する M. モンテーニュが、『エッセー』第 1 巻第 20 章で、「おまえたちの死は宇宙の一こまなのだ。世界の生命の一片なのだ」と言っている。おじいさんは、宇宙と生命の歴史の中にある、人間たちの舞台の一場の片隅にあって、よく理解もせずにその舞台を見ている。そこから、太古から続く長い人間たちのドラマを拙く考えてみた。君たちががまんして聞いてくれたことを、とても喜んでいる。おじいさんは、この一幕がどうなるのか、見終えることができないだろう。こんどは、君たちが見届けてくれたまえ。『エッセー』の第 20 章は、悲観を教えているのではない。「徳の中に輝く幸福がある」、そして、「企てというものはそれが目指すものの性質を帯びる」、と励ましているのだ。

孫に語る歴史 下巻

2013 年 3 月 初版

白江庵

